

伝えたいこと

美夏と直人は同じクラスで、席はとなりどうしだ。

「美夏さん、つくえの向きをそろえた方がいいよ。」

「えんぴつ、ちゃんとけずった方がいいよ。」

直人は、美夏に対して、毎日、こんな調子で、細かいことを注意してくる。美夏は何を言われても、初めは「はい、はい。」と聞いていたが、やがて、「いいじゃない、別に。」と、つき放すようになった。そして、いつのまにか、美夏と直人は、あまり話さなくなってしまった。

美夏と直人が二人で日直をする日がやってきた。おたがいに少し気まずい思いで一日が始まった。朝の会、給食、帰りの会の司会をしたり、教室をい動するとき、電気を消したりする。

美夏と直人は、帰りの会が終わったあと、みんなのつくえといすを整理し、落し物を



やごみがないかをかくにんした。

美夏は、入院しているおばあちゃんのお見まいに、お母さんといっしょに行くことになっていた。

（今日は、おばあちゃんのたん生日。早く帰って、おばあちゃんにわたす手紙を書かないと。）

と思いながら、美夏はまどをしめ始めた。

「あとは、まどと電気で、日直の仕事が終わるね。」

直人の声がなかったのでふり返ると、ろうか側のかべのけいじ物の前に立っている直人のせ中が見えた。

「何をしているの。」

「けいじ物の画びょうが取れているものがあるから、きれいにはり直しているんだよ。」
美夏はびっくりした。

「それは、けいじ当番の仕事じゃない。まどをしめて電気を消して帰ろうよ。」
「帰りたければ、先に帰っていいよ。」



直人^{なおと}のいつもの言い方だった。

「何よ、その言い方。わたしが日直^{しげ}の仕事^{しごと}をしないで帰るみたいじゃない。まどはしめたし、あとは電気を消^けして終わりよ。」

と、美夏^{みか}はきつく言った。直人^{なおと}は、

（だって、先生が言っていたよ。決められた仕事^{しごと}だけじゃなくて、気づいたことはやる^やることが大切だって。）

と思いながらだまってしまった。

「日直^{しげ}の仕事^{しごと}は終わりだから、わたしは帰る。あとは、勝手^{かつて}にやってね。」
と直人^{なおと}に言ったあと、美夏^{みか}は、教室の電気を消^けして帰ってしまった。

その日の夜、美夏^{みか}は、直人^{なおと}のことを思い出していた。

（このままでいいのかな。……）



次の日の朝、美夏が教室に入ると、直人はもう席に着いていた。美夏は、昨日の夜ずっと考えていたことの答えを直人に伝えた。

すると直人も美夏の方をまっすぐに向いて答えた。

それから、二人は少しずつ変わって、仲よくなっていっていった。

(野村 宏行 作)

